

北大構内の遺跡

XXVIII

令和2年度調査報告

第1部

K 39 遺跡北キャンパス創成科学研究棟東地区
その他

第2部

令和2年度年次事業報告

北海道大学
埋蔵文化財調査センター

令和4年3月

北大構内の遺跡

XXVIII

例 言

- 1 本書の第1部は、北海道大学構内において令和2（2020）年度に実施した埋蔵文化財調査の成果をまとめたもの、第2部は、令和2（2020）年度に実施した事業の年報である。
- 2 調査は北海道大学埋蔵文化財調査センター運営委員会、調査専門部会の指導のもと、北海道大学埋蔵文化財調査センターが中心となって実施した。令和2年度の埋蔵文化財調査センター運営委員会・調査専門部会・埋蔵文化財調査センター員は以下の通りである（所属・職名は令和2年度のもの）。
【埋蔵文化財調査センター運営委員会】
小杉 康 委員長（大学院文学研究院 教授、埋蔵文化財調査センター長）
菅原修孝 委員（理事）
高瀬克範 委員（大学院文学研究院 准教授）
増田隆一 委員（大学院理学研究院 教授）
渡部要一 委員（大学院工学研究院 教授）
佐野雄三 委員（大学院農学研究院 教授）
山本正伸 委員（大学院地球環境科学研究院 准教授）
江田真毅 委員（総合博物館 准教授）
【埋蔵文化財調査センター運営委員会調査専門部会】
小杉 康 部会長（大学院文学研究院 教授）
高瀬克範 部会員（大学院文学研究院 准教授）
増田隆一 部会員（大学院理学研究院 教授）
渡部要一 部会員（大学院工学研究院 教授）
佐野雄三 部会員（大学院農学研究院 教授）
山本正伸 部会員（大学院地球環境科学研究院 准教授）
江田真毅 部会員（総合博物館 准教授）
【埋蔵文化財調査センター員】
高倉 純
守屋豊人
- 3 本書の編集は小杉 康・高倉 純・守屋豊人がおこなった。執筆分担は文末に明示した。
- 4 整理作業に関しては、以下の人々が従事した。
伊藤麻由、奥山晋司、佐藤寿子、高倉 純、名取千春、守屋豊人、吉井圭子
- 5 調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。札幌市埋蔵文化財センター、北海道教育委員会
- 6 出土遺物・調査記録は、北海道大学埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。

凡 例

- 1 方位は真北に統一している。
- 2 緯度・経度は、世界測地系に統一している。
- 3 図面で使用したシンボル等の凡例は図1に示した。
- 4 土層観察の際の色相、土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原1996)を用いた。



図1 図面記述凡例図

《目次》

例言	1
凡例	2
目次	3
《本文目次》	
第1部 調査報告	5
第1章 北大構内の遺跡と調査の概要	6
I-1. 地理的環境と遺跡の立地	6
I-2. 2020年度の調査概要	9
第2章 調査の成果	11
II-1. K39 遺跡北キャンパス創成科学研究棟東地区の計画調査	11
1. 調査の目的	11
2. 調査の方法	13
3. 層序と古地形	15
4. まとめ	17
第3章 確認・立会調査の成果	20
III-1. 確認・立会調査で確認された層序	20
III-2. 2020年度確認調査・立会調査の結果	23
第2部 令和2年度年次事業報告	29
2-1. 調査活動	30
2-2. 教育普及活動	30
2-3. 点検・評価報告	32
2-4. 統計・資料	33
引用文献	37

《図目次》

図1 図面記述凡例図	2
図2 北大構内の遺跡と2020年度調査実施地点	7
図3 グリッド呼称図	10
図4 大学構内グリッド配置図(1マス100m)	10
図5 北キャンパス創成科学研究棟東地区と周辺の地点	12
図6 北キャンパス創成科学研究棟東地区セクション対比図	13
図7 構内確認調査セクション図	21
図8 構内確認・立会調査位置図(1)	24
図9 構内確認・立会調査位置図(2)	25
図10 構内確認・立会調査位置図(3)	26
図11 構内確認・立会調査位置図(4)	27
図12 構内確認・立会調査位置図(5)	27
図13 北大札幌キャンパス内のゾーン区分	31

《表目次》

表1 2020年度実施調査一覧	9
表2 北キャンパス創成科学研究棟東地区土層観察表(1)	14
表3 北キャンパス創成科学研究棟東地区土層観察表(2)	15
表4 北キャンパス創成科学研究棟東地区土層観察表(3)	16
表5 北大構内確認調査の層序観察表(1)	22
表6 北大構内確認調査の層序観察表(2)	23
表7 常設展示資料一覧表	30
表8 月別開館日数及び入館者数	33
表9 受領刊行物一覧表(1)	34
表10 受領刊行物一覧表(2)	35
表11 受領刊行物一覧表(3)	36

《写真目次》

写真1 北キャンパス創成科学研究棟東地区の調査(1)	18
写真2 北キャンパス創成科学研究棟東地区の調査(2)	19
写真3 2020年度確認・立会調査の状況	28
写真4 令和2年度第12回企画展の様子	30

第 1 部 調查報告

第 I 章 北大構内の遺跡と調査の概要

I-1 地理的環境と遺跡の立地

北海道大学の札幌キャンパスは、札幌市域の北部にある。札幌市域の地形は、第一に新第三紀から第四紀初頭に形成された北西部から南西部にかけての山地、第二に支笏火砕流堆積物からなる東部の丘陵や台地、第三に後期更新世から完新世中頃にかけて、豊平川や発寒川によって形成された扇状地や河岸段丘、第四に北部の沖積低地に大きく分けられる。

北大札幌キャンパスは、豊平川によって形成された豊平川扇状地から沖積低地への移行区域にある。平岸面と札幌面に分かれる豊平川扇状地において、北大札幌キャンパスの南側はおおよそ 3500 年前頃に形成されたとみられる（大丸 1989）札幌面の末端に位置する。キャンパス南側の人文・社会科学総合教育研究棟地点（小杉他編 2004・2005）では、標高 10.5 m 前後から札幌面を形成したと考えられる扇状地の堆積物が確認されている。一方キャンパスの北側では、低温科学研究所周辺で掘削されたボーリング・コアのデータをもとに、札幌面の堆積物は確認されていない（嵯峨山他 2007）。縄縄文化あるいはそれ以前に相当する段階に関しては、地形面の発達や時期ごとの堆積環境において、キャンパスの南側と北側には違いがあった可能性に注意しなければならない。

扇状地末端には湧水地点がかつては多くみられた。北大札幌キャンパスの南側に位置する植物園や清華亭、知事公館周辺にも湧水地点があった。こうした湧水地点からの流水を集めて形成された河川が、構内を南から北へむけて蛇行しながら流れていた。サクシュコトニ川、サクシュコトニ川の支流、セロンパツ川として区別し、知られている河川がそうしたものである。

それらの河川位置に関しては、古地図、等高線図、航空写真から理解できるほか、調査の過程で確認した埋設河道によっても検証できる。キャンパス内の河川は、流路の位置をときに大きく変えながら、縄縄文化や擦文文化に相当する時期には氾濫を繰り返していたようである。氾濫によって供給された堆積物やその侵食によって、河川周辺の微地形面（河谷、微高地、後背湿地など）

が形成されていったと考えられる。当該期の遺跡は、北大構内においては河川沿いの微高地から検出される場合が最も多いが、河谷内から確認される場合もある。

北大札幌キャンパスの全域は、植物園が「C 44 遺跡」、第二農場の一部が「K 435 遺跡」、それ以外の区域が「K 39 遺跡」として、埋蔵文化財包蔵地に登録されている。しかし、それらは実質的には「遺跡群」と呼べる。遺跡の集合と考えられる。本報告では、2002 年に刊行された報告（小杉編 2002）に準じ、便宜的に発掘調査がなされた区域ごとに「○遺跡○地点」と呼称して記載を進めていく。それぞれの地点の名称は、調査の原因となった工事に関連付けて設定することとした。

北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、1994 年に実施した大学構内の南側に位置するゲストハウス地点での調査において、北大構内での標準層序の統一化を検討した。その結果、層序を大きく 9 つに区分することが試案として提示された（吉崎編 1995）。また、毎回実施される試掘調査による堆積層のデータから、北大構内の堆積層位が大きく 4 つにまとまること（サクシュコトニ川の上流部左岸：大野池周辺、サクシュコトニ川上流部右岸：学術交流会館周辺、サクシュコトニ川の中流部右岸：工学部北部～低温科学研究所、サクシュコトニ川の下流部左岸もしくはセロンパツ川下流部の兩岸：第一農場北部）が示されている（小杉編 2002、小杉他編 2021）。

現在も、標準層序を念頭に置きながら、地域的な変異を考慮した堆積層位の体系的な理解を北大構内で進めており、発掘調査や試掘調査で確認された層序の対比をおこなう場合のために、以下に標準層序（吉崎編 1995）と文化層としての内容（小杉他編 2021）の概要を示す。

0 層：客土、盛土（近現代）

I 層：黒色土（旧表土）（推文～近現代）

II 層：灰色シルト（縄縄文化後半～擦文）

III 層：白色シルトと有機物の多い黒色土の互層（縄縄文化後半期）

IV 層：灰褐色シルト層・粘土層（縄縄文化前半期）

V 層：黒色と灰色の粘土の互層（縄縄文化晩期～縄縄文化前半期）

VI 層：灰褐色シルト層と粘土層（VI 層以下に縄縄文化中）

VII 層：青色粘土層

VIII 層：砂利、砂、シルトの互層

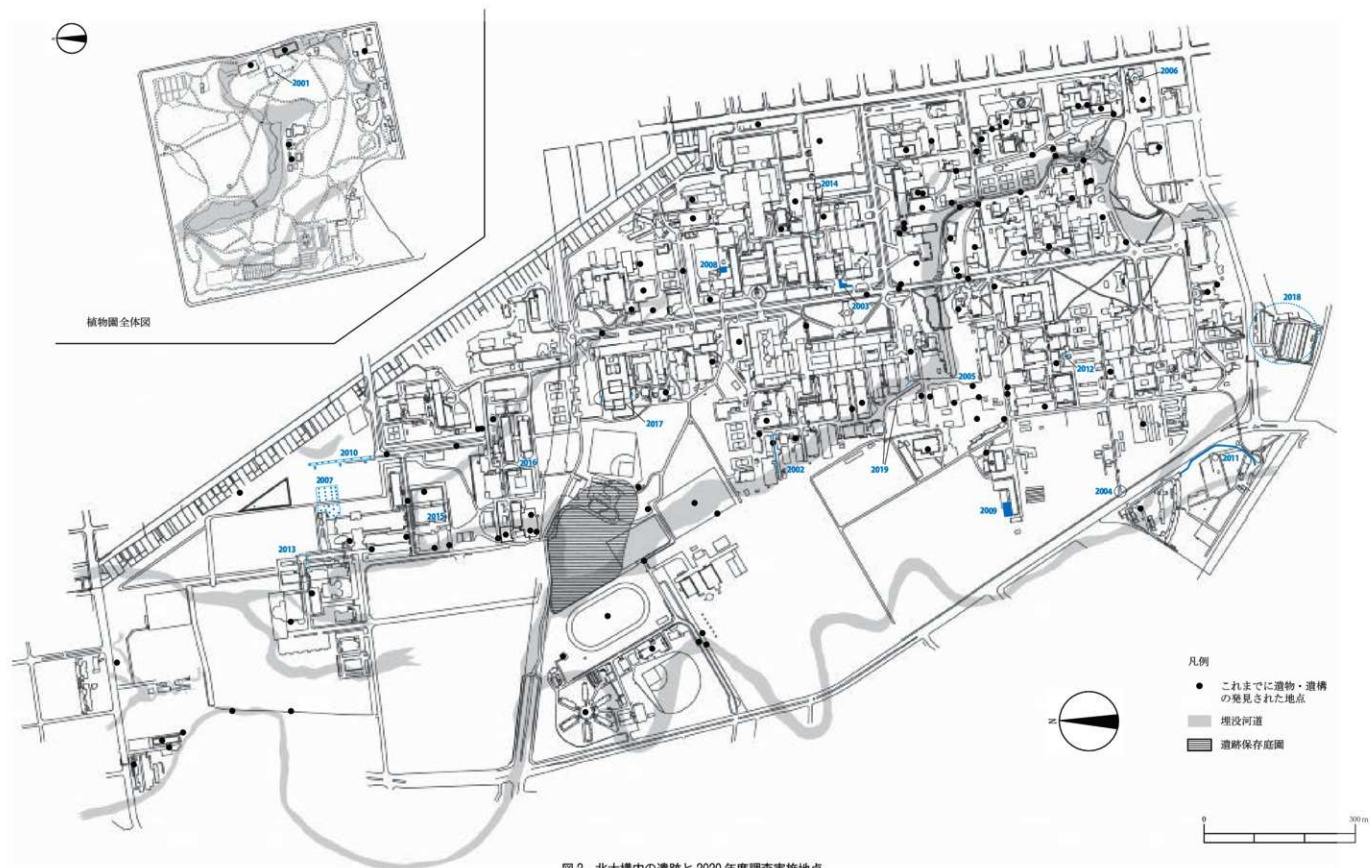


図2 北大構内の遺跡と2020年度調査実施地点

I-2 2020年度の調査概要

2020年度、北海道大学構内では本発掘調査1件、確認調査3件、計画調査1件、確認調査(立会)3件を実施した。また慎重工事12件がある(表1、図2)。調査件数に関しては工事名称から算出しているが、一工事案件に慎重工事と確認調査の両者を実施した場合には、それぞれの件数に振り分けて算定している。

本発掘調査は、北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟新営工事に伴う箇所(K39 遺跡北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟地点:調査番号2009)でおこなった。同地点での本発掘調査は2021年度にも継続して実施されており、最終的な調査報告は次年度おこなう予定である。

学術研究を目的とした計画調査として、2020年度においては北キャンパス創成科学研究棟東地区(調査番号

2007)で調査を実施した。

第1部調査報告では、第II章として2020年度に実施した計画調査1件(K39 遺跡北キャンパス創成科学研究棟東地区)の成果を報告する。第三章では表1で示した調査番号に基づき、確認調査、確認調査(立会)の成果の概要をまとめ、報告する。

なお、本発掘調査が実施された箇所に関しては、北海道大学札幌キャンパス内全体を対象に設定された5×5mを基本グリッドとする方眼を用いて各種の記録をおこなっている(図3、4参照)。この仮想原点の設定は、公共座標に対応させておこなった。北緯44°00'00"、東経142°15'00"の地点を基準点とし、X軸方向に-103307.649m、Y軸方向に-74767.738mの地点を方眼の仮想原点としている。Y軸の方位は、N10°55'33"Wである。Y軸とX軸との関係は数学系座標と同じであり、それぞれのグリッドには算用数字で記号を付して表記する。上記のことから、植物園の範囲は仮想原点よりも南に位置する。図4では示していないが、植物園の範囲はY軸方向の数値がマイナス表記となる。(高倉

表1 2020年度実施調査一覧

調査番号	調査日	工事名称	調査の種類	工事面積(m ²)	調査面積(m ²)	文化	遺構・遺物
2001	'20 5/28	植物園宮部記念館南側漏水修理工事	慎重工事	1.0	1.0	-	-
2002	'20 4/13-4/27	工学部開発科学実験施設系統高圧幹線ケーブル工事	確認調査(立会)	52.7	52.7	-	遺構・遺物なし
2003	'20 6/2-6/5	歯学部駐車場改修工事	慎重工事	230.0	230.0	-	-
2004	'20 6/23-6/29	第一農場道路等改修工事	確認調査	66.2	8.0	-	遺構・遺物なし
2005	'20 7/6-7/8	工学部G棟南側外灯電源切替工事	慎重工事	8.4	8.4	-	-
2006	'20 7/20-7/27	インフォメーションセンター空調設備改修工事	慎重工事	10.2	10.2	-	-
2007	'20 8/20-10/2	北キャンパス創成科学研究棟東地区	計画調査	2706.0	194.0	-	遺構・遺物なし
2008	'20 8/24-11/26	医学部車庫新営工事	確認調査(立会)	187.0	187.0	-	遺構・遺物なし
2009	'20 8/27-12/14	北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟新営工事	発掘調査	1136.0	R2年度: 1136.0	縄縄文	屋外炉址2基、焼土粒集 中箇所7基、土坑1基、 縄縄文土器、石器、礎
2010	'20 10/1-10/30	北キャンパス第二農場東地区排水設備工事	確認調査	872	48.0	-	遺構・遺物なし
2011	'20 10/19-11/20	苗畑通路取除工事	慎重工事	604.7	604.7	-	-
2012	'20 10/19-10/23	新低温濃化センター保管庫設置工事	確認調査	57.6	4.0	-	遺構・遺物なし
2013	'20 10/25-10/31	北キャンパス奥棟所設置工事	慎重工事	46.0	46.0	-	-
2014	'20 11/11-11/12	医学部構内通路等水面まり解消工事	慎重工事	14.0	14.0	-	-
2015	'20 11/16-11/19	北キャンパス総合研究棟4号館改修工事	慎重工事	21.3	21.3	-	-
2016	'20 11/19-11/20	根医学部屋外排水再補修工事	慎重工事	4.5	4.5	-	-
2017	'21 1/19-2/21	高等教育推進機構N棟実験室等空調設備設置工事	慎重工事	55.5	55.5	-	-
2018	'20 10/19-12/23	中央第2宿舍給水設備改修工事	慎重工事及び 確認調査(立会)	133.0	133.0	-	遺構・遺物なし
2019	'21 3/14-3/15	工学部資源棟観測井戸設置工事	慎重工事	11.7	11.7	-	-

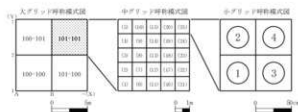


図3 グリッド呼称図

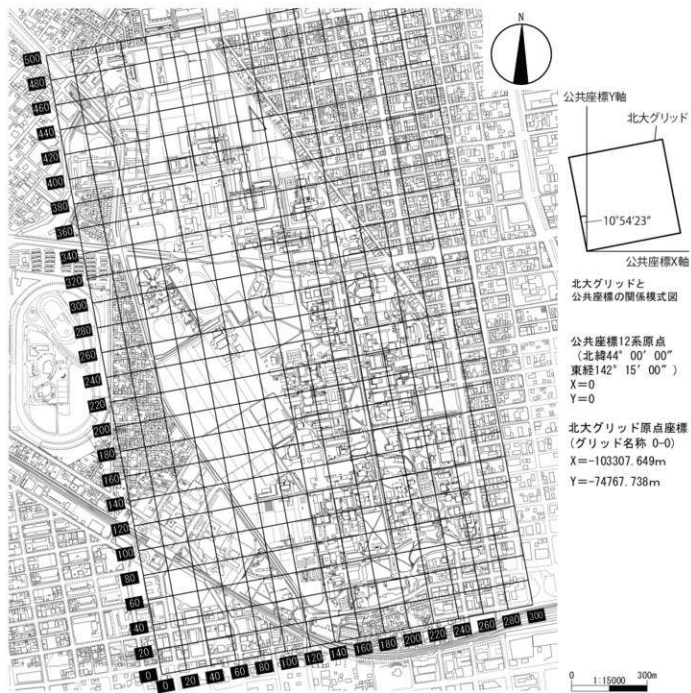


図4 大学構内グリッド配置図 (1マス100m)

第II章 調査の成果

II-1 K39遺跡北キャンパス創成科学研究棟東地区の計画調査

1. 調査の目的

北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、前身の埋蔵文化財調査室の時代を含め、長年にわたって北海道大学構内での工事に伴う事前調査に従事してきた。事前調査を通して、大学構内における古地形環境の変遷や埋蔵文化財の分布状況に関しては、膨大なデータを得ることができた。今後とも、北海道大学構内における埋蔵文化財を文化資源として適切かつ有効に保護・活用していくためには、それらのデータを体系的に整理するとともに、新たな学術調査を系統的に大学構内で実施していくことにより、古地形環境や埋蔵文化財の遺存状況について、精度の高い予測をおこなえるようにしていくことが必要である。そのため北海道大学埋蔵文化財調査センター運営委員会では、大学構内で計画的に学術調査（以下、計画調査）を展開していくために、平成27年度、「計画調査第一次中期計画」を策定した。この計画では、①サクシュコトニ川・セロンベツ川ならびにその支流の流路を把握し、流路において進行した下刻や堆積の時期・過程を解明する、②サクシュコトニ川・セロンベツ川ならびにその支流内および周辺における遺構・遺物の分布範囲や地点の集中区域を把握する、③各種の考古・古環境データを有機的に統合するための時間的枠組みを構築するために、キャンパス各区域間での層序対比を体系的に実施し、キャンパス全域での堆積環境を明らかにすることを目標とした。そのための現地調査を平成28年度から開始し、令和元年度まで実施した。成果の詳細については令和2年度刊行の最終報告を参照されたい（小杉他編2021）。

令和2年度からは新たな「計画調査第二次中期計画」を策定し、それにもとづき計画調査を継続的に実施していくこととなった。第二次中期計画では、第一次中期計画で目標とした前記三点に関する知見の成果にもとづき、その検証のためのデータを系統的に獲得していくこ

とを目標として定めている。令和2年度は、北キャンパス地区におけるサクシュコトニ川の支流の有無の把握と、またその周辺での人類活動の痕跡の確認を目的として、北キャンパス創成科学研究棟東地区（以下、本地区）において計画調査が実施されることとなった。

本地区は、北海道大学北キャンパスの第二農場東側に位置しており、現況は畑地である（図5）。周辺では南側にK39遺跡創成科学研究棟南地点がある（小杉他編2006）。同地点では、平成15年度に実施された本発掘調査の成果によって、サクシュコトニ川の支流右岸の平坦面に続縄文後中期の遺構・遺物が残されていることが明らかにされている。同地点は、後北C-D式期の短期的なキャンプ・サイトとして利用されていた。この遺構・遺物のひろがりには、同地点の東側に隣接するK39遺跡北キャンパス道路地点北側調査範囲（小杉他編2011）にも連続していることが本発掘調査の成果から明らかになっている。両地点の南側には、サクシュコトニ川の支流の流路内から、二次堆積した縄文・続縄文期の遺物が多量に出土したK39遺跡人獣共通感染症研究拠点施設地点（小杉他編2016）が所在する。この地点では、続縄文後中期の初頭段階で流路が形成され、その後、この流路は堆積物によって次第に埋積していった過程が把握されている。創成科学研究棟南地点や北キャンパス道路地点北側調査範囲での人類活動の展開は、この流路の形成と密接に関連していた。

本地区での計画調査は、創成科学研究棟南地点および北キャンパス道路地点北側調査範囲の調査で確認された続縄文期の人類活動の痕跡が北側にひろがっていないのか否かを確認することが目的となる。また加えて、本地区より北側約400mの距離に位置する、平成18年度に試掘調査が実施された札幌駅前通樹木移植工事地点のTP01では、続縄文期のもと考えられる遺物が出土しており（小杉他編2008）、その周辺では南側から北側へ流れていた流路の存在が予測できる。その流路の位置を南側へたどっていくと本地区周辺にあることが予測できるので、本地区での調査によってその正確な位置を把握することも目的となる。

本地区での計画調査は、令和2年6月30日付で北海道教育委員会に発掘調査の届出をおこなって実施された。令和2年8月20日～10月2日の期間、194㎡を対

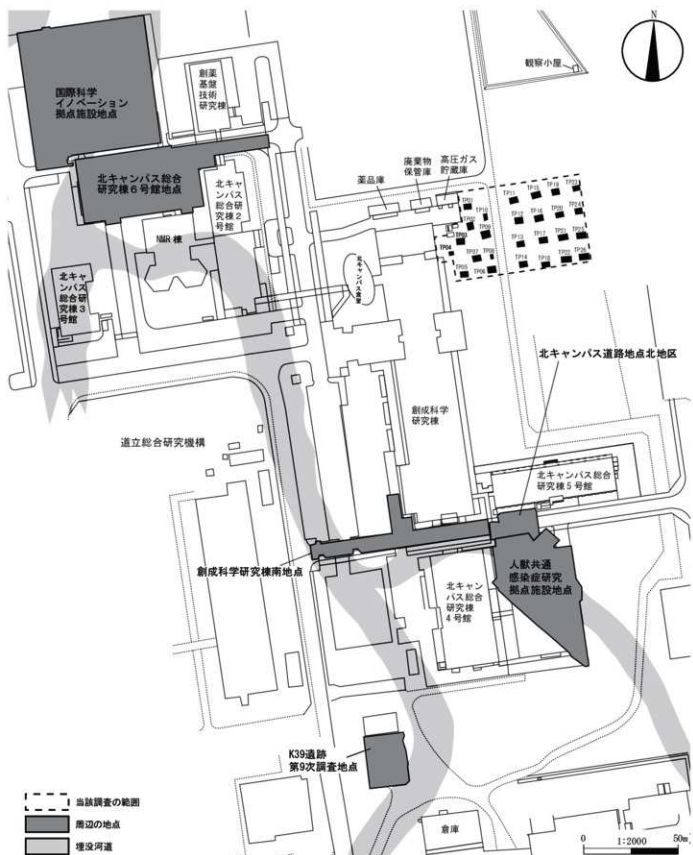


図5 北キャンパス創成科学研究棟東地区と周辺の地点

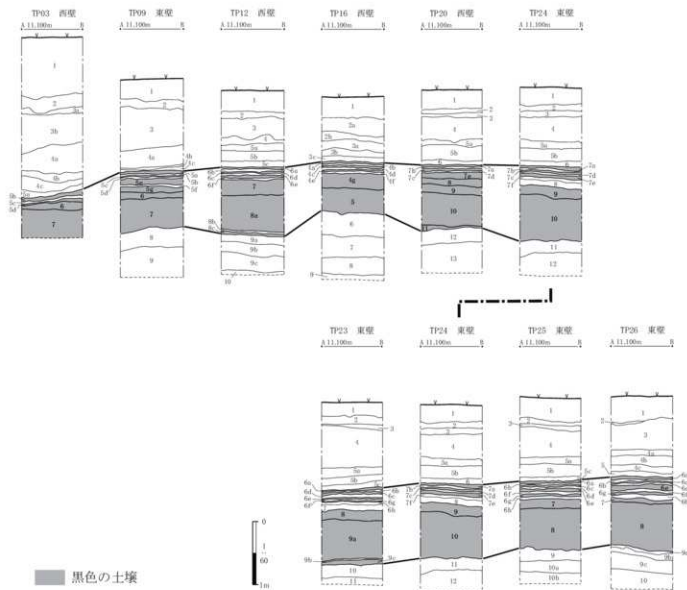


図6 北キャンパス創成科学研究棟東地区セクション対比図

象に実施された。

2. 調査の方法

地形面の把握や層序の対比、遺構・遺物のひろがりの確認を目的に、計画調査の対象地内に計26箇所の調査坑を設定し、調査を実施した(図5)。

調査目的の一つである統縄文期の遺構・遺物は、創成科学研究棟南地点での調査成果によって、地表下約1mの深さに残されていることが予想された。ただし、地形面の把握や層序、とくに縄文晩期から統縄文期初頭にかけての時期に当該区域にひろがっていたと予測される泥炭層の確認のため、基本的に各調査坑では地表面から約

3mの深さまで掘り下げ調査を実施した。約4mの深さまで調査を実施している調査坑もある。ただし、軟弱な表層地質であったこともあり、安全面への配慮から、地表下約1.5mの深さまで掘り下げるとどまった調査坑もある。各調査坑の面積は4~9m²である。

掘削は主に重機を用いて実施されたが、遺物・遺構の包含が予想される層準に関しては人手を併用して掘削が進められた。調査坑の範囲の平面記録をおこなう際には、北海道大学札幌キャンパス全体を対象に設定されたグリッドを用い、トータル・ステーションによって座標位置を記録した。調査坑や遺構の断面図記録は、写真撮影の後、人手で図化した。調査終了後は埋め戻し、原状

表2 北キャンパス創成科学研究棟東地区土層観察表(1)

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 03 西壁	1		客土				
	2	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	やや強	やや強	
	3a	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	3b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	やや弱	
	4a	7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	中	
	4b	10 YR 4/1	褐灰色	シルト質粘土	強	中	
	4c	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	やや強	
	5a	2.5 Y 4/1	黄灰色	粘土	強	やや強	
	5b	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	有機物含む。
	5c	10 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	やや強	
5d	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	有機物含む。	
6	5 Y 3/2	オリーブ黒色	泥炭質粘土	やや強	やや強		
7	10 YR 2/3	黒褐色	泥炭	中	中	樹木含む。	
TP 09 東壁	1		客土				
	2	7.5 YR 3/2	黒褐色	シルト	やや弱	やや強	
	3	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	弱	
	4a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	4b	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	中	
	4c	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	5a	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭質粘土	強	やや強	
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	5c	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	強	
	5d	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	やや強	
	5e	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	7.5 YR 5/3 にぶい褐色粘土の薄層含む。
	5f	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	強	
	5g	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	
	6	10 YR 3/1	黒褐色	泥炭質粘土	やや強	やや強	
	7	5 Y 2/1	黒色	泥炭	中	中	樹木を含む。
8	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	やや強		
9	7.5 YR 4/1	灰褐色	極細粒砂	強	中		
TP 12 西壁	1		客土				
	2	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	中	
	3	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒～細粒砂	弱	やや弱	
	4	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	極細粒砂質シルト	やや強	中	
	5a	7.5 YR 6/4	にぶい橙色	粘土	強	やや強	7.5 YR 3/1 黒褐色粘土の薄層含む。
	5b	7.5 YR 4/2	灰褐色	シルト	強	やや強	
	5c	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	7.5 YR 3/1 黒褐色粘土の薄層含む。
	6a	10 YR 2/1	黒色	泥炭	中	中	
	6b	10 YR 4/3	褐色	粘土	強	やや強	
	6c	2.5 Y 2/1	黒色	粘土	強	中	
	6d	10 YR 4/3	褐色	粘土	強	やや強	
	6e	2.5 Y 2/1	黒色	粘土	強	中	
	6f	10 YR 4/3	褐色	粘土	強	やや強	
	7	7.5 YR 3/1	黒褐色	泥炭質粘土	強	強	
	8a	10 YR 2/2	黒褐色	泥炭	中	中	
8b	10 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	やや強		
8c	10 YR 2/2	黒褐色	泥炭	中	中		
9a	10 YR 4/1	灰褐色	粘土	強	やや強		
9b	10 YR 5/1	灰褐色	シルト	強	中		
9c	10 YR 4/1	灰褐色	極細粒砂	強	やや弱		
10	7.5 YR 4/1	灰褐色	粘土	強	やや強		
TP 16 西壁	1		客土				
	2a	2.5 Y 4/6	オリーブ褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	2b	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	3a	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	強	中	
	3b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	3c	7.5 YR 6/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	7.5 YR 3/1 黒褐色粘土の薄層含む。
	4a	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭	やや強	中	
	4b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	中	
	4c	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	
	4d	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	中	
	4e	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	
	4f	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	中	
	4g	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	
	5	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭	中	やや強	
	6	10 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中	
7	2.5 Y 4/1	黄灰色	極細粒砂	中	やや弱		
8	10 YR 4/1	褐灰色	細粒砂	中	やや弱		
9	10 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中		

表3 北キャンパス創成科学研究棟東地区土層観察表(2)

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP20 西壁	1		客土				
	2	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	中	
	3	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	中	
	4	10 YR 4/6	褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	5a	10 YR 6/3	にぶい黄褐色	シルト	やや強	中	
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	6	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	強	7.5 YR 3/1 黒褐色粘土の薄層含む。
	7a	10 YR 2/1	黒色	泥炭	やや強	中	
	7b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	7c	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	強	
	7d	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	7e	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	強	7.5 YR 5/4 にぶい褐色粘土の薄層含む。
	8	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	強	
	9	7.5 YR 2/2	黒褐色	泥炭質粘土	やや強	中	
10	7.5 Y 2/1	黒色	泥炭	中	やや弱		
11	7.5 YR 2/3	極暗褐色	泥炭質粘土	中	やや弱		
12	5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	中		
13	7.5 YR 4/1	灰色	細粒砂	弱	弱		
TP23 東壁	1		客土				
	2	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	中	
	3	7.5 YR 4/4	褐色	シルト	中	やや弱	
	4	2.5 Y 4/6	オリブ褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	5a	5 Y 5/2	灰オリブ色	シルト質粘土	やや強	中	7.5 YR 3/1 黒褐色シルトの薄層含む。
	5b	2.5 Y 4/2	暗灰黄色	粘土	やや強	やや強	
	5c	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	中	7.5 YR 2/1 黒色粘土の薄層含む。
	6a	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭質粘土	中	中	
	6b	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強	
	6c	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中	
	6d	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強	
	6e	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中	
	6f	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強	
	6g	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中	
	6h	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強	
	7	10 YR 4/1	暗灰色	粘土	強	中	
	8	2.5 Y 3/1	黒褐色	泥炭質粘土	中	中	10 YR 5/3 にぶい黄褐色粘土の薄層含む。
	9a	10 YR 2/1	黒色	泥炭	やや弱	やや弱	
9b	2.5 Y 4/1	黄灰色	粘土	中	中		
9c	10 YR 2/1	黒色	泥炭	やや弱	やや弱		
10	5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	やや弱		
11	7.5 Y 4/1	灰色	細粒砂	やや弱	やや弱		
TP24 東壁	1		客土				
	2	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	中	
	3	7.5 YR 4/4	褐色	シルト	中	中	
	4	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	5a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	中	7.5 YR 3/1 黒褐色粘土の薄層を上部に含む。
	6	7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	やや強	7.5 YR 2/1 黒色泥炭の薄層を上部に含む。
	7a	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭質粘土	中	中	
	7b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	7c	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	中	
	7d	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	7e	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	中	
	7f	10 YR 4/2	灰黄褐色	粘土	強	中	
	8	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中	
9	7.5 YR 3/1	黒褐色	泥炭質粘土	やや強	中	10 YR 5/4 にぶい黄褐色粘土の薄層含む。	
10	7.5 YR 2/1	黒褐色	泥炭	やや弱	やや弱		
11	7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	やや強		
12	7.5 YR 4/1	褐色	細粒砂	やや強	中		

復帰させた。

調査の結果、いずれの調査坑からも遺構や遺物は確認されなかった。

3. 層序と古地相

本地区は、豊平川扇状地の北側にひろがる沖積低地に立地していると考えられる。本地区で確認された表層層序は、基本的に河川の営力によって運ばれてきた堆積物とその土壌化を受けたものから構成されていると考えら

表4 北キャンパス創成科学研究棟東地区土層観察表(3)

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP25 東壁	1		客土				
	2	10 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	やや強	
	3	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	弱	
	4	5YR 4/4	にぶい赤褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	弱	
	5a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト質粘土	強	やや強	有機物含む。
	5c	7.5 YR 6/3	にぶい褐色	粘土	強	中	7.5 YR 2/1 黒色泥炭の薄層含む。
	6a	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	中	
	6b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	6c	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	中	
	6d	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	6e	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	中	
	6f	7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	中	
	6g	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	中	
	6h	7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	中	
	7	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭	中	やや弱	7.5 YR 5/2 灰褐色粘土の薄層含む。
8	5Y 2/2	オリーブ黒色	泥炭	やや弱	やや弱		
9	7.5 Y 4/1	灰色	粘土	強	中		
10a	5Y 4/1	灰色	極細粒砂	やや強	やや弱		
10b	10 YR 4/1	褐灰色	細粒砂	中	やや弱		
TP26 東壁	1		客土				
	2	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	やや弱	
	3	2.5 YR 4/6	赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	4a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	4b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	4c	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	強	中	
	5	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土	強	中	7.5 YR 3/1 黒褐色泥炭の薄層含む。
	6a	10 YR 2/2	黒褐色	泥炭	中	やや弱	
	6b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6c	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	6d	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6e	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強	7.5 YR 5/4 にぶい褐色粘土の薄層含む。
	6f	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中	
	6g	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	6h	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中	
	7	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土質泥炭	中	やや弱	
8	7.5 YR 2/1	黒褐色	泥炭	やや弱	やや弱		
9a	7.5 Y 4/1	褐灰色	粘土	強	中		
9b	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	強	中		
9c	10 YR 4/2	灰黄褐色	粘土	強	中		
10	10 Y 4/1	灰色	細粒砂	やや弱	弱		

れる。そうした性質を鑑み、堆積過程とその土壌化の履歴に留意しながら、それぞれの調査坑で層序の区分と記載を実施した(図6)。観察された層序は以下の通りである。各調査坑で確認された層序は、相互に共通性が高かったため、ここではTP09を代表させて説明する。

1層は客土である。2層は黒褐色シルトである。土壌化の影響を受けている層準と考えられる。削平されて本層が残されていない調査坑も多く認められた。3層は褐色の極細粒～細粒砂で、ラミナが発達する。4層は粘土で、粒径や色調の違いにより4a層～4c層に細分した。4a層と4c層はにぶい褐色、4b層は灰褐色を呈する。5層は黒色泥炭質粘土や粘土と灰褐色やにぶい褐色の粘土の互層である。黒色の泥炭質粘土や粘土には有機物を多く含んでいる。6層は黒褐色の泥炭質粘土である。有機物を多量に含む。7層は黒色の泥炭である。8層は、灰褐色粘土である。9層は褐灰色の極細粒砂である(図

6)。他の調査坑では極細粒砂の層の下位にまた粘土の堆積が確認されている。

層群としては、黒褐色のシルト(2層)、褐色の砂(3層)、にぶい褐色や灰褐色の粘土(4層)、黒色の泥炭・粘土と灰褐色の粘土の互層(5～8層)、褐灰色の砂(9～層)に大きく区分できる。層群を構成する各層の厚さや粒径・色調には変化が認められるものの、層群の前後関係や基本的な特性は各調査坑間で共通している。埋没河道は今回の調査範囲内からは確認されなかった。したがって、とくに地形面の変化は、調査対象範囲内において認められなかったことになる。

黒色の泥炭・粘土と灰褐色の粘土の互層(5～8層)に対比できる層準は、人獣共通感染症研究拠点施設地点(小杉他編2016)や北キャンパス人獣共通感染症リサーチセンター南地区(小杉他編2021)でも確認されており、北キャンパス区域に共通してみられる層群であるといえ

る、人獣共通感染症研究拠点施設地点や北キャンパス人獣共通感染症リサーチセンター南地区での調査成果にもとづくと、これらの層群は、縄文晩期から縄文初期頭にかけての時期に形成されたものと考えられる。当該期の北キャンパス区域には泥炭地が広域に形成されていたことになり、同時期の中央キャンパス・南キャンパス区域とは異なる状況にあったことが想定される（小杉他編 2021）。縄文期の半ば以降は、北キャンパス区域では泥炭地から氾濫原に環境が変化し、K 39 遺跡創成科学研究棟南地点や K 39 遺跡北キャンパス道路地点北側調査範囲での調査成果からも明らかのように、本地区周辺では新たな流路の形成とともに人類活動が展開されるようになる。本地区でも同様の堆積環境の変化が確認された。

4. まとめ

計画調査を実施した結果、遺物・遺構は確認されなかったが、本地区での古地形変遷を把握することができたため、本地区を含めた周辺域にどのような地環境がひろがり、そこで人間活動がいつ頃、どのように展開されるようになったのかについての見通しをここで示しておくことにしたい。

かつて実施した札幌駅前通樹木移植工事地点での調査からは、本地区周辺から北側にむけて北キャンパス内に存在していた流路が予測できることとなったが、本地区内ではその流路の埋没河道を確認することはできなかった。本地区よりもさらに東側に流路があった可能性が考えられることになる。本地区の東側に隣接する区域に関しては、本報告書の第三章で報告するように、令和2年度に北キャンパス第二農場東地区排水設備工事として確認調査が実施されている。その調査対象範囲の北側に位置する TP 01 において埋没河道が確認されており、これが上述の流路に対応する可能性が高い。この調査では河谷の一部を把握したにとどまっているため、その開析の時期や埋積の過程を把握するにはいたっていない。周辺での今後の調査によって解明されなければならないであろう。

また、創成科学研究棟南地点（小杉他編 2006）や国際科学イノベーション拠点施設地点（小杉他編 2016）で確認された流路の埋没河道も今回の調査では確認されなかった。両地点で確認された埋没河道は同じ連の流路であった可能性が高いが、それは本地区よりもさらに西側にあったことになろう。

本地区の調査坑では堆積層は概ね水平に堆積していたため、平坦な地形面がひろがっていたとみられる。縄文

期の人類活動との関連が予測される、サクシユコトニ川の支流に相当する流路は、本地区よりもさらに東側あるいは西側に想定されることになる。（高倉）



A. TP03 西壁 (東より)



B. TP09 東壁 (西より)



C. TP12 西壁 (東より)



D. 調査状況 (TP14 遠景：北より)



E. TP14 西壁 (東より)



F. TP16 西壁 (東より)



G. 調査状況 (TP17：北西より)



H. TP17 西壁 (東より)

写真1 北キャンパス創成科学研究棟東地区の調査(1)



A. TP 20 西壁 (東より)



B. 調査状況 (TP 21 遠景：北西より)



C. TP 21 東壁 (西より)



D. TP 23 東壁 (西より)



E. TP 24 東壁 (西より)



F. TP 25 東壁 (西より)



G. TP 26 東壁 (西より)



H. TP 26 西壁 (東より)

写真 2 北キャンパス創成科学研究棟東地区の調査(2)

第Ⅲ章 確認・立会調査の成果

Ⅲ-1 確認・立会調査で確認された層序

1. 層序

1章で述べた通り、令和2年度に北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、3件の確認調査、3件の確認調査(立会)を実施し、大学構内各所で層序記録に関する断面の調査・記録をおこなってきた。本節では、このうち確認調査が実施された第一農場道路等改修工事、北キャンパス第二農場東地区排水設備工事と極低温液化センター保管庫設置工事に伴う調査(図7)によって確認された層序を示し、北大構内標準層序(吉崎編1995)との相違について言及しておきたい。

第一農場道路等改修工事予定地は、北海道大学札幌中央キャンパスの西側に位置する。本予定地での確認調査は、令和2年6月23日～6月29日の期間に実施された。図7-1に本予定地での層序の断面図を示す。

1層は客土である。客土の下には暗褐色粘土質シルト(2層)が確認された。2層中には椽前a降下火山灰(Ta-a)が含まれていた。2層の下位には暗褐色粘土(3層)、にぶい黄褐色粘土(4層)、褐灰色粘土(5層)、にぶい黄褐色粘土(6層)の堆積が認められた。3層および5層中には炭化物状の粒子が観察された。TP01・04では6層の下位ににぶい黄褐色粘土質シルト(7層)が確認された。TP01・02では3～5層が西から東へ傾斜していた一方で、TP03・04では水平な堆積が確認された。また、すべての調査坑で椽前a火山灰の降下堆積物が確認された。このことは、窪地状の旧地形が本工事予定地周辺には存在していた可能性を示唆している。

K39 遺跡ゲストハウス地点での調査成果をもとに設定された北大構内標準層序(吉崎編1995)との対比としては、2層はI層に、3～7層はII層もしくはIII層に対応すると考えられる。

北キャンパス第二農場東地区排水設備工事予定地は、北海道大学札幌北キャンパスに位置する。本予定地での確認調査は、令和2年10月1日～10月30日の期間に実施された。図7-2に本予定地での層序の断面図を示す。

TP02～12の間で確認された層序は基本的に対応するので、ここではTP07を代表させて説明する。

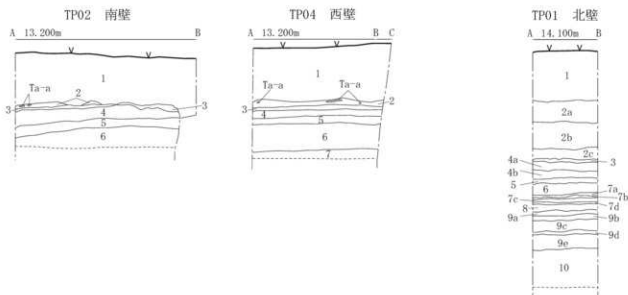
1層は客土である。2層は褐灰色シルトである。土壌化の影響を受けている層準と考えられる。削平されて本層が残されていない調査坑も多く認められた。3層はにぶい褐色シルトである。4層は褐色の極細粒～細粒砂である。層厚が約50cm程度あり、短期間で多量の堆積物がもたらされたことを示している。5層は粘土や泥炭であり、有機物を多く含む黒色の粘土や泥炭とにぶい褐色の粘土が互層状に堆積している。色調の違いにより5a層～5e層に細分した。6層も粘土であり、有機物を多く含む黒褐色や暗褐色の粘土と褐灰色の粘土が互層状に堆積している。色調によって6a層～6g層に細分した。7層は黒色の泥炭である。8層は黒褐色の粘土である。9層は粘土や泥炭で、9a層～9c層に細分した。9a層と9c層は灰色の粘土で、間にオリブ黒色の泥炭である9b層が挟まっている。

層群としては、褐灰色やにぶい褐色のシルト(2～3層)、褐色の砂(4層)、黒色の泥炭や粘土とにぶい褐色の粘土との互層(5～9層)に大きく区分できる。層群を構成する各層の厚さや粒径・色調には変化が認められるものの、層群の前後関係や基本的な特性は各調査坑間で共通している。したがって、とくに地形面の変化は、調査対象範囲内のうちTP02～12においては認められなかったことになる。

黒色の泥炭や粘土とにぶい褐色の粘土との互層(5～9層)に対比できる層準は、人獣共通感染症研究拠点施設地点(小杉他編2016)や北キャンパス人獣共通感染症リサーチセンター南地区(小杉他編2021)でも確認されており、北キャンパス区域に共通してみられる層群であるといえる。人獣共通感染症研究拠点施設地点や北キャンパス人獣共通感染症リサーチセンター南地区での調査成果にもとづくと、これらの層群は、縄文晩期から続縄文期初頭にかけての時期に形成された可能性が高いと考えられる。当該期の北キャンパス区域は泥炭地が形成されていたことになり、同時期の中央キャンパス・南キャンパス区域とは異なる状況にあったことが想定される。続縄文期の半ば以降は、北キャンパス区域では泥炭地から氾濫原に環境が変化し、褐色の砂(4層)、褐灰色やにぶい褐色のシルト(2～3層)の順で堆積物が堆積して

1. 第一農場道路等改修工事 (2004)

3. 極低温液化センター保管庫設置工事 (2012)



2. 北キャンパス第二農場東地区排水設備工事 (2010)

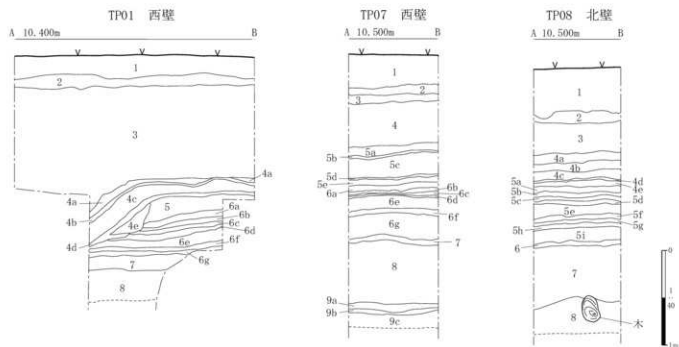


図7 構内確認調査セクション図

表5 北大構内確認調査の層序観察表(1)

調査区名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
第一農場道路等改修工事 (2004) TP 02 西壁	1						客土
	2	7.5 YR 3/4	暗褐色	シルト	やや弱	やや弱	Ta-aを含む。
	3	7.5 YR 3/2	黒褐色	粘土質シルト	中	強	炭化物状粒子を含む。
	4	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト	中	やや強	黒色粒子を含む。
	5	10 YR 3/3	暗褐色	粘土質シルト	中	やや強	炭化物状粒子を含む。
	6	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	中	中	
第一農場道路等改修工事 (2004) TP 04 西壁	1						客土
	2	7.5 YR 3/4	暗褐色	粘土質シルト	中	中	Ta-aを含む。
	3	10 YR 3/2	黒褐色	粘土	中	やや強	炭化物状粒子を含む。
	4	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	中	中	
	5	10 YR 3/3	暗褐色	粘土	強	やや強	炭化物状粒子を含む。
	6	10 YR 6/2	灰黄褐色	粘土	強	中	
	7	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	弱	やや強	φ1cmの炭化物粒子を少量含む。
北キャンパス第二農場 東地区排水設備工事 (2010) TP 01 西壁	1						客土
	2	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	やや弱	中	
	3	5 YR 4/8	赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	4a	10 YR 4/1	褐色	粘土	やや強	中	
	4b	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	中	やや強	
	4c	10 YR 4/1	褐色	粘土	やや強	中	
	4d	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	中	やや弱	
	4e	10GY 3/1	暗緑灰色	中粒砂	弱	弱	
	5	10 YR 4/1	褐色	粘土	やや強	中	
	6a	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭	中	中	
	6b	7.5 YR 5/2	灰褐色粘土	粘土	強	中	
	6c	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中	
	6d	7.5 YR 5/2	灰褐色粘土	粘土	強	中	
	6e	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中	
6f	7.5 YR 5/2	灰褐色粘土	粘土	強	中		
6g	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中		
7	5GY 2/1	オリーブ黒色	泥炭質粘土	中	中		
8	N 2/1	黒色	泥炭	中	やや弱		
北キャンパス第二農場 東地区排水設備工事 (2010) TP 07 西壁	1						客土
	2	10 YR 4/1	褐色	シルト	中	中	
	3	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	やや弱	
	4	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	5a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	やや強	中	
	5b	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	やや弱	やや弱	
	5c	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	やや強	中	
	5d	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭	やや弱	やや弱	
	5e	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	やや強	中	
	6a	7.5 YR 2/3	暗褐色	粘土	中	中	7.5 YR 4/6 褐色粘土の薄層含む。
	6b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6c	10 YR 2/2	黒褐色	粘土	やや強	中	
	6d	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6e	10 YR 2/2	黒褐色	粘土	やや強	中	2.5 Y 5/4 黄褐色粘土の薄層含む。
6f	2.5 Y 4/2	暗灰黄色	粘土	強	中		
6g	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	中		
7	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭	やや弱	中		
8	7.5 YR 2/2	黒褐色	粘土	弱	やや弱		
9a	7.5 Y 4/1	灰色	粘土	強	中		
9b	5 Y 2/2	オリーブ黒色	泥炭	弱	弱		
9c	7.5 Y 4/1	灰色	粘土	強	中		
北キャンパス第二農場 東地区排水設備工事 (2010) TP 08 北壁	1						客土
	2	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	やや強	
	3	5 YR 4/8	赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	4a	5 YR 5/3	にぶい赤褐色	シルト	弱	やや強	
	4b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	やや強	中	7.5 YR 3/1 黒褐色粘土の薄層含む。
	4c	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	粘土	強	中	7.5 YR 3/1 黒褐色粘土の薄層含む。
	4d	7.5 YR 2/1	黒褐色	泥炭質粘土	中	やや弱	
	4e	7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	中	
	5a	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭質粘土	中	中	
	5b	7.5 YR 5/1	褐色	粘土	強	中	
	5c	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	中	やや弱	
	5d	7.5 YR 5/1	褐色	粘土	強	中	
	5e	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	中	やや弱	7.5 YR 4/1 黒褐色粘土の薄層含む。
	5f	10 YR 4/1	褐色	粘土	強	中	
5g	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	中	やや弱		
5h	10 YR 4/1	褐色	粘土	強	中		
5i	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	中		
6	7.5GY 2/1	緑褐色	泥炭	中	やや弱	2.5 Y 4/1 黄灰色粘土の薄層含む。	
7	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭	弱	弱		
8	10 YR 3/1	暗赤灰色	粘土	強	やや強		

表6 北大構内確認調査の層序観察表(2)

調査区名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
極低温液化センター保 管庫設置工事(2012) TP01北壁	1						客土
	2a	10 YR 4/6	褐色	シルト	やや弱	やや強	
	2b	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	やや弱	
	2c	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	極細粒砂	中	強	
	3	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	中	強	
	4a	10 YR 4/4	褐色	シルト	中	やや強	
	4b	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	やや強	やや弱	
	5	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	中	10 YR 5/4 にぶい黄褐色粘土をブロック状に含む。
	6	10 YR 6/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや強	やや弱	
	7a	10 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	
7b	7.5 YR 3/4	暗褐色	シルト質粘土	中	中		
7c	10 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強		
7d	10 YR 4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	やや強	中		
8	7.5 YR 4/6	褐色	細粒砂	やや弱	弱		
9a	10 YR 3/2	黒褐色	粘土	強	やや強	掘鉄鉋やや多く含む。	
9b	10 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	掘鉄鉋やや多く含む。	
9c	5 YR 2/2	オリーブ黒色	粘土	強	中	2.5 Y 6/2 灰黄色粘土の薄層を含む。掘鉄鉋多く含む。	
9d	10 YR 3/4	暗褐色	粘土	中	やや強		
9e	10 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	掘鉄鉋多く含む。	
10	10 YR 6/4	にぶい黄褐色	粘土	やや強	やや強	下部は 10 Y 5/1 灰色にグライ化。	

いったと考えられる。K39 遺跡創成科学研究棟南地点(小杉他編 2006)などで人間活動の痕跡が残されるようになったのは、この時期のこととみられる。こうした北キャンパスで確認された層序は、北大構内標準層序(吉崎編 1995)とは対応するものではなく、異なる堆積環境にあったと考えられる。

北キャンパス第二農場東地区排水設備工事予定地の TP01 では、小規模な埋没河道が、南東方向から北西方向にむかって存在していたことが判明した。5 層から 8 層までは黒褐色の泥炭や粘土と灰褐色の粘土の互層で、TP02～12 で確認できる堆積物と共通しているが、この 5 層を侵食するようにして暗緑灰色中粒砂である 4e 層が堆積し、さらに黒色・黒褐色粘土と褐色粘土の互層である 4d～4a 層が堆積している。その上には 3 層となる赤褐色砂と 2 層となる黒褐色シルトが水平に堆積している。TP02 やその他の調査坑ではこの埋没河道が確認されなかったことから、流路そのものの幅は小規模であったと考えられる。TP07 で確認された 5～9 層の層群である泥炭とシルト・粘土の互層が堆積した時期の終末段階で小規模な谷状の地形を形成するような浸食が起こっていたことになる。

極低温液化センター保管庫設置工事予定地は、北海道大学札幌中央キャンパスに位置する。本予定地での確認調査は、令和 2 年 10 月 19 日～10 月 23 日の期間に実施された。

図 7-3 に本予定地での層序の断面図を示す。本予定地の層序は、客土(1 層)、褐色や赤褐色のシルト・砂層(2a～2c 層)、黒色や黒褐色の粘土と褐色や黄褐色の粘土質シルト・シルト・砂の互層(3～8 層)、黒色や黒褐色、暗褐色の粘土層(9a～9e 層)、黄褐色の粘土層(10 層)に大きく区分できる。

本予定地に接した北側には K39 遺跡遺伝子実験施設

地点がある(吉崎・岡田編 1988)。K39 遺跡遺伝子実験施設地点は、遺伝子実験施設の建設に先立ち、昭和 60 年度に発掘調査が実施された。本地点では、地表下 0.3 m の深さまでが客土で、その下位には層厚 0.2～0.3 m の黒色土があり、さらにその下位には褐色土の堆積が認められた。黒色土を取り除いた段階で層厚時期不明の遺構(土坑 2 基)とその覆土から遺物(土器片 2 点、礫 1 点)が確認されている。遺物包含層とみられる黒色土より下位の褐色土は本予定地の 2a 層に対応するとみられるため、本予定地では遺物包含層は削平されてしまった可能性がある。

本予定地で確認された層序は、K39 遺跡ゲストハウス地点での調査成果をもとに設定された北大構内標準層序(吉崎編 1995)と対比可能である。本予定地の 2a～2c 層が II 層、3～8 層が III～IV 層、9a～9e 層が V 層にそれぞれ対応すると考えられる。確認された層相、周辺での調査成果や標準層序との対比もふまえると、これらの堆積物は、河道内に堆積したのではなく、河道周辺の平坦面に堆積したものであると想定される。

III-2 2020 年度確認調査・立会調査の結果

a. 工学部開発科学実験施設系統高圧幹線ケーブル工事(2002)

工学部開発科学実験施設系統高圧幹線ケーブル工事予定地は、北海道大学札幌キャンパスの西部に位置する。52.7 m²を対象に確認調査(立会)を実施した。掘削深

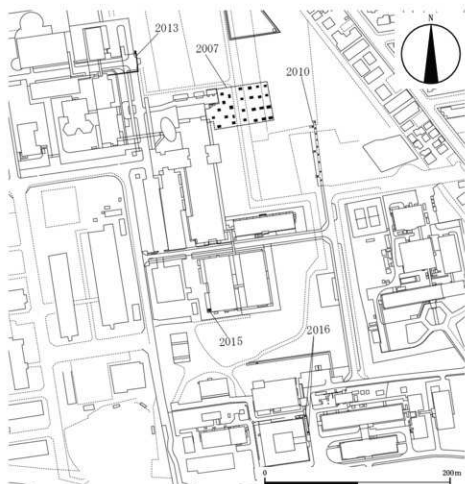


図8 構内確認・立会調査位置図(1)

度は、ケーブル敷設部分が地表下0.6~0.7mの深さまで、ハンドホール設置部分が地表下約1.8mの深さまでであった。この掘削深度ではいずれも客土の範囲にとどまっていた。遺物・遺構は確認されなかった。

b. 第一農場道路等改修工事 (2004)

第一農場の西側の位置で、道路等改修工事の実施が計画されたため、工事対象範囲内の埋蔵文化財の有無を把握するための確認調査が実施された。工事対象範囲は約66m²で、4つの調査坑(TP 01~04)を配置し、8m²を対象として、遺構・遺物の有無、地形や堆積過程を明らかにするための調査を実施した。調査の深度は約1.2mである。調査の結果、確認された層序については前述の通りである。本予定地内の自然堆積物からは遺物・遺構は検出されなかった。

c. 医学部車庫新當工事 (2008)

本工事予定地の周辺には、西側にK39遺跡医学部百年記念館地点(小杉他編2019)がある。同地点では、本発掘調査の成果によって、小規模な河川によって形成さ

れた河谷に埋積していた堆積物中から擦文期の遺物が確認されている。医学部百年記念館地点で確認された埋設河道は、北海道大学医学部付近から北キャンパス第二農場の方向へむけて流れていたと想定される。医学部車庫設置に伴う掘削が計画されたことをうけ、埋蔵文化財の有無を確認するため、187m²を対象に確認調査(立会)を実施した。本工事では地表下約0.9mの深さまで掘削がなされた。今回実施された掘削の深度は、いずれも客土の範囲にとどまっており、自然堆積層に到達することはなかった。遺物・遺構は確認されていない。

d. 北キャンパス第二農場東地区排水設備工事 (2010)

北キャンパス第二農場東地区排水設備工事のための確認調査が実施された。工事対象範囲は872m²で、12の調査坑(TP 01~12)を配置し、48m²を対象として確認調査を実施し、遺構・遺物の有無、地形や堆積過程を明らかにするための調査を実施していった。それぞれの調査坑の大きさは基本的に2×2mである。調査の深度は2.0~3.0mとした。段を設けて調査をおこなった。

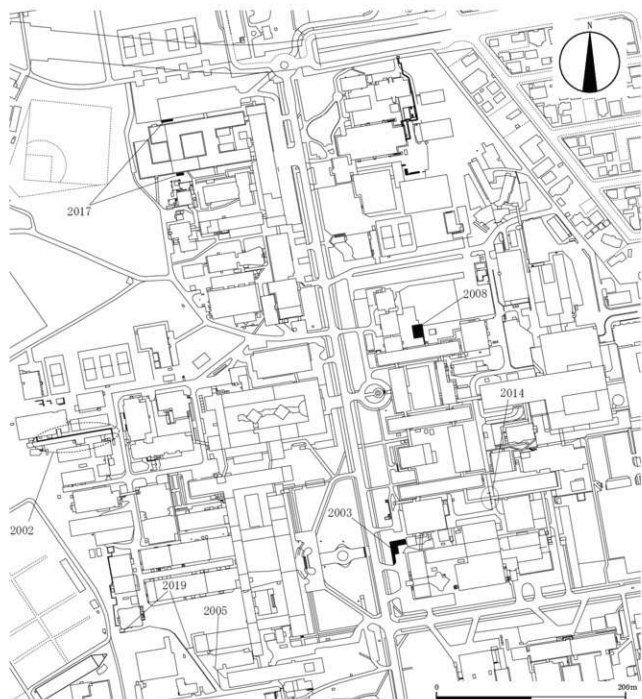


図9 構内確認・立会調査位置図(2)

調査の結果、確認された層序について前述した通りである。層群としては、黒褐色のシルト、褐色の砂やシルト、黒色の泥炭と灰褐色・明褐色のシルトや粘土の互層、黒色の泥炭、粘土や粘土の互層に大きく区分できた。層群を構成する各層の厚さや粒径・色調には変化が認められるもの、層群の前後関係や基本的な特性は各調査坑間で共通している。したがって、とくに地形面の変化は、

調査対象範囲内において認められなかったことになる。ただし、TP 01では、泥炭とシルト・粘土の互層の層準で谷状の浸食が起っていたことが確認できた。小規模な河道が、TP 01の南東方向から北西方向にむかって存在していたことが判明した。この河道は他の調査坑では確認されていない。本予定地内の自然堆積物からは遺物・遺構は検出されなかった。

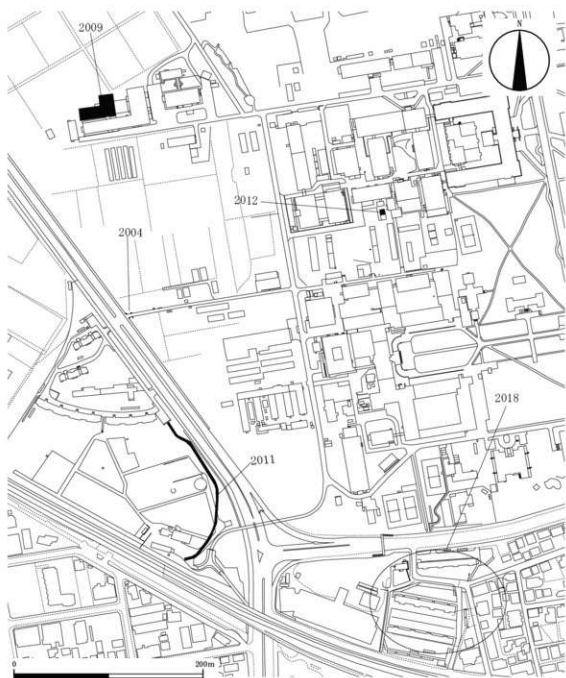


図 10 構内確認・立会調査位置図(3)

e. 極低温液化センター保管庫設置工事 (2012)

極低温液化センター保管庫設置工事のための確認調査が実施された。工事対象範囲は約 57 m² で、1つの調査坑 (TP 01) を配置し、4 m² を対象として確認調査を実施し、遺構・遺物の有無、地形や堆積過程を明らかにするための調査を実施した。調査の深度は約 2.5 m である。調査の結果、確認された層序については前述の通りである。本予定地内の自然堆積物からは遺物・遺構は検出されなかった。

f. 中央第二宿舍給水設備改修工事 (2018)

札幌キャンパスの南側に位置する中央第二宿舍内で給水管の改修のための工事が実施された。133 m² の工事予定地内に関して確認調査 (立会) を実施した。工事範囲内が地表下約 0.7~1.5 m の深さまで掘削された。掘削深度は客土の範囲内にとどまっており、自然堆積層は確認されなかった。いずれの箇所でも遺物・遺構は確認されなかった。(高倉)

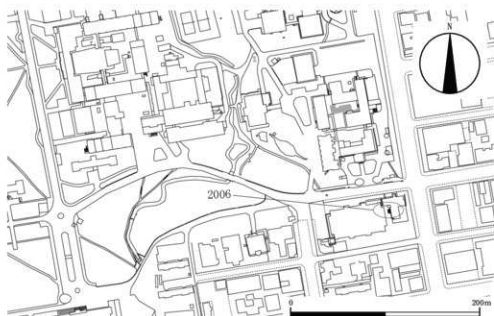


図11 構内確認・立会調査位置図(4)

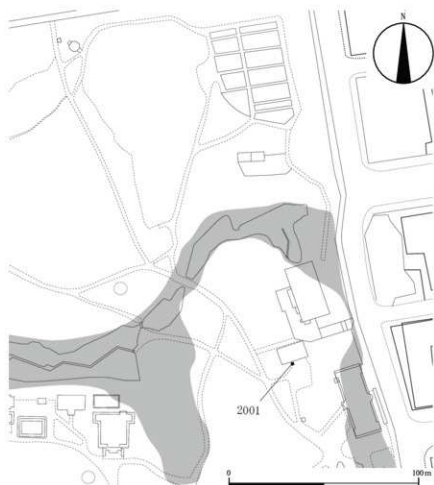


図12 構内確認・立会調査位置図(5)



A. 第一農場道路等改修工事 TP 02 南壁 (北より) 調査番号: 2004



B. 医学部車庫新営工事 (南より) 調査番号: 2008



C. 北キャンパス第二農場東地区排水設備工事 TP 01 西壁 (東より) 調査番号: 2010



D. 北キャンパス第二農場東地区排水設備工事 TP 07 西壁 (東より) 調査番号: 2010



E. 北キャンパス第二農場東地区排水設備工事 TP 08 北壁 (南より) 調査番号: 2010



F. 極低温液化センター保管庫設置工事 TP 01 北壁 (南より) 調査番号: 2012



G. 中央第二宿舍給水設備改修工事 (北より) 調査番号: 2018



H. 中央第二宿舍給水設備改修工事 (西より) 調査番号: 2018

写真3 2020年度確認・立会調査の状況

第 2 部 令和 2 年度年次事業報告

2-1 調査活動

1. 緊急調査一本発掘・確認・立会調査及び慎重工事

令和2年度に北海道大学構内では、本発掘調査1件、確認調査3件、計画調査1件、確認調査(立会)3件、慎重工事12件が行われた。計画調査に関しては第1部II章、確認・立会調査に関してはIII章を参照いただきたい。

2. 計画調査—基盤情報整備

平成27年からの5年間で第一次計画調査期間として、計画的な発掘調査のための基盤情報の整備に着手した。基盤情報の整備では、昭和55年度～平成31年度(令和元年度)までの調査活動によって得られた各種データ(遺構・遺物の種類・位置情報、地層の堆積状態、埋設河道の位置・広がり、既調査深度など)をキャンパス地図(図13)に関連付けて、データ類の一元的検索システムの構築を進めている。これらの基盤情報整備の成果を踏まえて、平成28年度から令和元年度まで、キャンパス内の各所で野外調査を実施した(小杉他編2021)。

第一次計画調査期間の成果をふまえ、そこで明らかにされた北キャンパスや中央キャンパスでの地形環境や遺物・遺構包含層に関する課題を解決するために、令和2年度からは第二次計画調査期間に着手している。令和2年度は、北キャンパス内での地形環境と縄縄文期の人間活動の痕跡のひろがりを確認するために、北キャンパス創成科学研究棟東地区において計画調査を実施するに至った。

2-2 教育普及活動

1. 北海道大学埋蔵文化財調査センター展示室

a. 常設展示

開館時間は午前9時から午後4時30分まで、休館日は毎週土曜・日曜日、年末年始(12月29日～1月3日)、祝日である。夏季期間中(7月19日～8月31日迄)金曜の開館時間の延長、及び土・日曜の開館を実施した。無料である。令和2年度は新型コロナウイルスの感染拡大のために、4月17日から7月13日の期間、展示室を閉室した。また9月以降、開室日も原則午前9時から

表7 常設展示資料一覧表

展示場所	展示内容	展示物
ケース1	縄文文化前期・縄縄文文化	土器10点、石器14点、パネル2点
ケース2	縄縄文文化	土器18点、石器81点、玉類4点、コハク玉4点、パネル1点
ケース3	縄縄文文化	土器26点、石器104点、玉類4点、パネル3点
ケース4	縄縄文文化	屋外炉址(網ぎ取り)
ケース5	縄文文化	土器29点、石器16点、土製品1点、パネル1点
ケース6	縄文文化・アイヌ文化期	土器13点、石器27点、土製品8点、土玉17点、コハク玉2点、鉄製品2点、骨製品1点、木製品3点、自然遺物12点、パネル7点
ケース7	縄文文化	土器30点、鉄製品1点、パネル8点
ケース8	アースドレン	遺構・遺物分布図
ケース9	企画展示	地下記夢
ケース9	アースドレン	遺構・遺物分布図、土器1点、パネル3点

午後3時までと開館時間も短縮した。

2. 企画展示

a. 第12回企画展示「北大構内の縄文遺跡展」

開催期間：令和3年3月1日～6月30日

北海道大学構内の縄文遺跡から検出された遺構・遺物を一同に展示した。

展示物：写真と文章による解説パネル9点(人文・社会科学総合教育研究棟地点、人獣共通感染症研究拠点施設地点)、土器31点(畜産製造実習室新営工事地点2点、附属図書館本館再生整備地点8点、人獣共通感染症研究拠点施設地点18点)、人文・社会科学総合教育研究棟地点3点)、石器26点(人獣共通感染症研究拠点施設地点14点)、人文・社会科学総合教育研究棟地点12点)



写真4 令和2年度第12回企画展の様子

3. 北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター

北大構内から発見された考古資料や関連科学の研究成果について解説した特集とともに、調査センター主催の行事案内を掲載している。ニュースレターは、調査セン

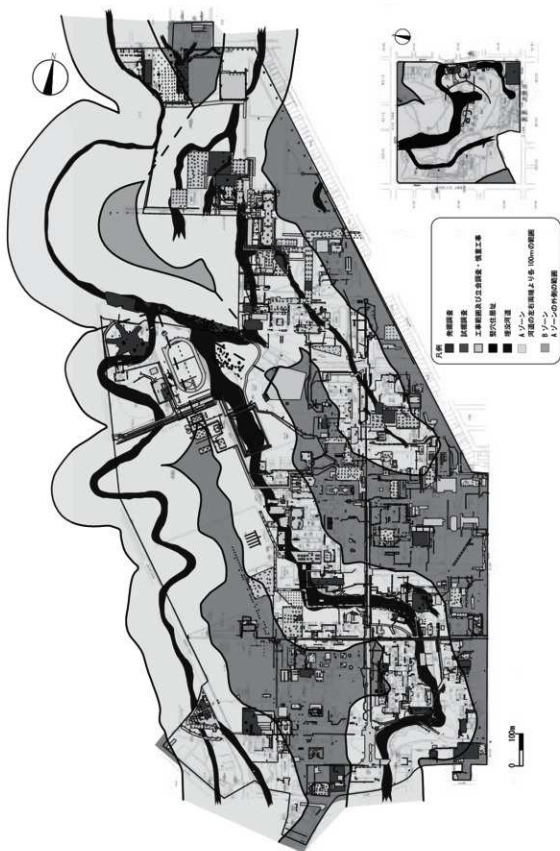


図13 北大札幌キャンパス内のゾーン区分

ターのホームページで閲覧、あるいはPDFをダウンロードできる。令和2年度は第36号～第38号を刊行した。第36号(令和3年1月発行)は、「縄文文化中期にさかのぼる遺跡」と題し、札幌市域での地形発達と構内での縄文遺跡からの出土資料の概要について紹介した。第37号(令和3年2月発行)は、「曲物」と題し、北大構内で発見された木製の曲物について紹介した。第38号(令和3年3月発行)は、「磨製石斧」と題し、北大構内で発見された縄文・続縄文期の磨製石斧の形態や製作技術、使用過程について紹介した。

4. 「北大構内の遺跡Ⅱ」の刊行

平成31年度・令和元年度の緊急調査、計画調査、年次事業報告をまとめ、報告書として2021年3月に刊行した。当センターのホームページで閲覧、PDF版をダウンロードできる。

5. 遺跡トレイルウォーク

令和2年度は新型コロナウイルスの感染拡大のために、開催を中止した。

6. 調査成果報告会

令和2年度は新型コロナウイルスの感染拡大のために、開催を中止した。

7. 資料利用

a. 資料貸出

- ・株式会社かみゆ 丹波篤志
資料：サクシュコトニ川遺跡出土の「美」と刻まれた土師器画像・デジタルデータ
日時：令和2年5月25日
- ・株式会社NHKグローバルメディアサービス 報道番組部部長 竹中友美
資料：北大式土器 写真画像
期間：令和2年9月30日7時40分頃及び10月5日5時40分頃(同内容を2度放送)
- ・沙流川歴史館 館長 森岡健治
資料：サクシュコトニ川遺跡報告書「図版編」に掲載されているカマドの写真計6点
日時：令和2年10月30日～11月29日(特別展示)
- ・柴田美幸
資料：畜産製造実習室新営工事地点および人獣共通感染症研究拠点施設地点、附属図書館本館再生整備地点出土の縄文土器の写真
期間：令和2年11月下旬(北海道文化財団発行「北の

とびら」掲載)

- ・株式会社アイワード 馬場康広
資料：サクシュコトニ川遺跡調査状況および出土遺物に関する画像2点
期間：令和3年1月15日(「季刊アイワード」掲載)

b. 資料見学

- ・池谷和信(国立民族博物館)
資料：埋蔵文化財調査センター展示室・図書室
日時：令和3年3月8日
- ・大西早織(同志社大学学生)
資料：サクシュコトニ川遺跡出土の土器
日時：令和3年3月17日～19日

8. ホームページ

当センターの行事案内や刊行物の公開を目的としてホームページを開設している。本年度は12回の更新を行った。

2-3 点検・評価報告

北海道大学では、国立大学法人北海道大学評価規定第6条および第7条により、埋蔵文化財調査センターが属する学内共同施設(特定業務施設)を含む各部局は、点検および評価をおこなうとともに、法人評価および認証評価に対応するための組織として部局評価組織をおこなうことが規定されている。各部局は、原則として中期目標期間の4年目に、教育・研究、組織・運営、施設・設備の状況について自己点検・評価を実施し、その結果を公表することが求められている。また、自己点検・評価の結果の妥当性について、学外者・第三者による検証を受け、その結果を公表する時期を、自己点検・評価の実施時期との整合性を考慮のうえ定めることが求められている。

平成27年4月に学内共同施設(特定業務施設)として設置された埋蔵文化財調査センターでは、それ以降の活動や組織・運営、施設・設備のあり方について、本学が定めた第3期中期目標期間の4年目である令和元年度に設置した評価委員会において、自己点検・評価をおこなった。評価委員会は、小杉康(埋蔵文化財調査センター・文学研究院)、佐野雄三(農学研究院)、高瀬克範(文学研究院)、高倉純(埋蔵文化財調査センター)、守屋豊人(埋蔵文化財調査センター)から構成されている。自己点検・評価の結果を受け、令和2年度には外部評価委員

を福永伸哉大阪大学大学院文学研究科教授に委嘱し、学外者・第三者による外部点検・評価を受けた。

この自己点検・評価と外部点検・評価の結果を取りまとめ、令和3年3月31日付で「北海道大学埋蔵文化財調査センター点検・評価報告書」を冊子体として刊行し、関係部局に配布した。

2-4 統計・資料

1. 入館データ

a. 月別開館日数及び入館者数

表8 月別開館日数及び入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	12	0	0	12	20	19	22	19	30	19	18	23	184日
入館者数	32	0	0	44	130	76	112	49	21	32	37	84	617人

2. 組織・構成

a. 埋蔵文化財運営委員会

委員長	小杉 康	(文学研究院 教授)
委員	菅原 修孝	(理事)
	高瀬 克範	(文学研究院 准教授)
	増田 隆一	(理学研究院 教授)
	渡部 要一	(工学研究院 教授)
	佐野 雄三	(農学研究院 教授)
	山本 正伸	(地球環境科学研究院 准教授)
	江田 真毅	(総合博物館 准教授)

b. 調査専門部会

部会長	小杉 康	(文学研究院 教授)
部会員	高瀬 克範	(文学研究院 准教授)
	増田 隆一	(理学研究院 教授)
	渡部 要一	(工学研究院 教授)
	佐野 雄三	(農学研究院 教授)
	山本 正伸	(地球環境科学研究院 准教授)
	江田 真毅	(総合博物館 准教授)

c. 北海道大学埋蔵文化財調査センタースタッフ

センター長	小杉 康	(文学研究院 教授)
センター員	高倉 純	(助教)
	守屋 豊人	(特任助教)
	佐藤 寿子	(事務補助員)

表9 受領刊行物一覧表(1)

1.	〔通内〕
1.	いしかり砦丘の風資料館 『いしかり砦丘の風資料館紀要9巻』
2.	いしかり砦丘の風資料館 『いしかり砦丘の風資料館紀要10巻』
3.	浦鏡町立博物館 『浦鏡町立博物館紀要 第20号』
4.	浦鏡町立博物館 『浦鏡町立博物館紀要 第21号』
5.	愛媛県教育委員会 『北海道道庁発掘調査報告書第4 志摩町内遺跡発掘調査報告書』
14.	札幌市教育委員会 『札幌市埋蔵文化財センター』 『札幌市文化財調査報告書』第13巻 大船1遺跡』
6.	公益財団法人 アイヌ民族文化財団(ウゾゴイ内) 『国立アイヌ民族博物館ニュースレター ANU/ANU 簡報記念特別号 vol.001』
9.	公益財団法人 アイヌ民族文化財団(ウゾゴイ内) 『国立アイヌ民族博物館ニュースレター ANU/ANU vol.002』
10.	公益財団法人 アイヌ民族文化財団(ウゾゴイ内) 『国立アイヌ民族博物館ニュースレター ANU/ANU vol.003』
11.	札幌国際大学縄文世界遺産研究室 『年報4 縄文』
12.	札幌市教育委員会 『札幌市埋蔵文化財センター』 『丘珠縄文遺跡年報1 丘珠縄文遺跡』
13.	札幌市教育委員会 『札幌市埋蔵文化財センター』 『丘珠縄文遺跡年報2 丘珠縄文遺跡』
14.	札幌市教育委員会 『札幌市埋蔵文化財センター』 『札幌市文化財調査報告書』108 M355 遺跡』
15.	札幌市教育委員会 『札幌市市民文化局文化財課埋蔵文化財課』 『市内遺跡発掘調査報告書』12 令和元年度 調査報告書』
16.	樺根町教育委員会 『樺根郷土館紀要 2号』
17.	樺根町博物館 『樺根町博物館紀要 第1号』
18.	苫小牧市埋蔵文化財調査センター 『発見1 遺跡、発見2 遺跡』
19.	苫小牧市埋蔵文化財調査センター 『発見1 遺跡』
20.	根室市歴史と自然の資料館 『根室市歴史と自然の資料館年報』2020 No.35 くらまい』
21.	根室市歴史と自然の資料館 『根室市歴史と自然の資料館年報』第32号』
22.	函館市教育委員会 一般財団法人 道南歴史文化財団財団 『函館市教育委員会 一般財団法人道南歴史文化財団財団発掘調査報告書 第11編 函館市 大船2遺跡』
23.	函館市教育委員会 一般財団法人 道南歴史文化財団財団 『函館市教育委員会 一般財団法人道南歴史文化財団財団発掘調査報告書 第12編 函館市 大船1遺跡』
24.	函館市教育委員会 一般財団法人 道南歴史文化財団財団 『函館市教育委員会 一般財団法人道南歴史文化財団財団発掘調査報告書 第13編 函館市 権現台地遺跡』
25.	実務院研究所 『学報埋蔵文化財各種発掘調査報告書』
26.	北海道大学大学院工学研究科考古学研究室 『礼文半島遺跡第3次調査 遺跡範囲再調査の記録』
27.	北海道博物館 『森のちえれんがニュース vol.20 (2020夏)』
28.	北海道博物館 『森のちえれんがニュース vol.21 (2020秋)』
29.	北海道博物館 『森のちえれんがニュース vol.22 (2020冬)』
30.	公益財団法人北海道埋蔵文化財センター 『調査年報』33 令和2年度』
31.	公益財団法人北海道埋蔵文化財センター 『北海道埋蔵文化財センター重要遺跡確認調査報告書 第15巻』
32.	公益財団法人北海道埋蔵文化財センター 『北海道埋蔵文化財センター』 『北海道埋蔵文化財センター年報21』
33.	利尻町立博物館 『利尻町史(利尻町立博物館年報 第40号)』
〔通外〕	
34.	南都府教育委員会 『南都府興津城跡(リウズ10 国史跡聖寿寺館跡 平成30年度、平成31年度から令和元年度南都府内遺跡発掘調査事業報告書』
35.	南都府教育委員会 『南都府内遺跡発掘調査報告書』止守寺遺跡、西久根遺跡、佐野平遺跡、黒木遺跡、沢渡遺跡』
36.	京都府立大学社会学部 北日本考古学研究会 『史跡山王寺跡の緒言1』
37.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第209巻 石神J遺跡発掘調査報告書 第1分冊』
38.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第209巻 石神J遺跡発掘調査報告書 第2分冊』
39.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第209巻 石神J遺跡発掘調査報告書 第3分冊』
40.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第209巻 石神J遺跡発掘調査報告書 第4分冊』
41.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第210巻 中平遺跡発掘調査報告書』
42.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第211巻 青嶺1遺跡発掘調査報告書』
43.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第212巻 千代田遺跡発掘調査報告書』
44.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第213巻 下代田遺跡発掘調査報告書』
45.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第214巻 サニニ遺跡発掘調査報告書』
46.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第215巻 田ノ尾遺跡発掘調査報告書』
47.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第216巻 杉の堂遺跡発掘調査報告書』
48.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第217巻 万丁遺跡発掘調査報告書』
49.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第218巻 田垣遺跡、田垣跡跡、田垣平遺跡発掘調査報告書 第1分冊』
50.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第218巻 田垣遺跡、田垣跡跡、田垣平遺跡発掘調査報告書 第2分冊』
51.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第218巻 田垣遺跡、田垣跡跡、田垣平遺跡発掘調査報告書 第3分冊』
52.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第218巻 田垣遺跡、田垣跡跡、田垣平遺跡発掘調査報告書 第4分冊』
53.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第219巻 長谷倉日輪発掘調査報告書』
54.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第220巻 下村遺跡発掘調査報告書』
55.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査報告書』第221巻 令和元年度発掘調査報告書』
56.	〔公財〕若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター 『紀要 第39号』
57.	一般財団法人九州文化財団財団 奥州埋蔵文化財調査センター 『若手民族文化財団事業部埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書』第17巻 明持下遺跡』
58.	若手県立野野町教育委員会 『野野町埋蔵文化財調査報告書』第5巻 下石遺跡発掘調査報告書』
59.	若手県立野野町教育委員会 『野野町埋蔵文化財調査報告書』第6巻 純正遺跡発掘調査報告書』
60.	若手県立野野町教育委員会 『野野町埋蔵文化財調査報告書』第7巻 南木1 遺跡、小川ノ沢遺跡発掘調査報告書』
61.	若手県立野野町教育委員会 『野野町埋蔵文化財調査報告書』第8巻 尻川遺跡発掘調査報告書』
62.	若手県立野野町教育委員会 『野野町埋蔵文化財調査報告書』第9巻 西平内1 遺跡発掘調査報告書』
63.	若手県立宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書』104 織田山田1 遺跡発掘調査報告書』
64.	若手県立宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書』105 高沢V下地跡遺跡』
65.	若手県立宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書』106 越田松長1 遺跡発掘調査報告書』
66.	若手県立宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書』107 神田遺跡』
67.	若手県立宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書』108 早稲畑1 遺跡 (第8次調査)』
68.	若手県立宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書』109 高田遺跡』
69.	若手県立宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書』110 赤石V遺跡 (第2次、第3次調査)』
70.	若手県立宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書』111 津野村大沢遺跡』
71.	若手県立宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書』112 東渡辺 (第6次調査)』
72.	若手県立宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書』113 棚内1 遺跡』

表 11 受領刊行物一覧表(3)

147.	加賀市教育委員会 「加賀市所蔵文化財報告書 第44集 国史定跡九谷稲部跡跡跡調査報告書148.
148.	公益財団法人石川県歴史文化財センター 「いしかわの遺跡 No61」
149.	公益財団法人石川県歴史文化財センター 「いしかわの遺跡 No62」
150.	公益財団法人石川県歴史文化財センター 「いしかわの遺跡 No63」
151.	公益財団法人石川県歴史文化財センター 「年報 21 (平成 30年度)」
152.	公益財団法人石川県歴史文化財センター 「七尾市 七尾城跡1」
153.	公益財団法人石川県歴史文化財センター 「小浜市 久御前遺跡」
154.	公益財団法人石川県歴史文化財センター 「白山市・野々市市 一日市イナバ遺跡 2 日目 A 遺跡」
155.	公益財団法人石川県歴史文化財センター 「白山市 高見遺跡 (第3次) 米ノアヅオ遺跡 (第3次) 宮保日遺跡 (第5次)」
156.	公益財団法人石川県歴史文化財センター 「金沢市 金沢町下町遺跡 (本寺界外敷地地区)」
157.	公益財団法人石川県歴史文化財センター 「石川県歴史文化財情報 第41号」
158.	公益財団法人石川県歴史文化財センター 「石川県歴史文化財情報 第42号」
159.	奈良大学文学部考古学研究室 「奈良大学考古学紀要第41号」
160.	静岡県歴史文化財センター 「ふじのくに考古通信 Vol.29」
161.	静岡県歴史文化財センター 「ふじのくに考古通信 Vol.30」
162.	名古屋大学学術地域環境研究所 「文部科学省科学研究費補助金 (新学術領域研究) 2016-2020 バレオアジア文化史学 アジアにおけるホモ・サピエンス定着期の気候変動と居住環境の解明」
163.	名古屋大学学術地域環境研究所 「文部科学省科学研究費補助金 (新学術領域研究) 2016-2020 バレオアジア文化史学 第10回研究会 バレオアジア文化史学—アジア諸人文化形成プロセスの総合的研究」
164.	京都大学大学院文学部研究科附属文化遺産学・人文知識センター 「京都大学総合博物館 2020年度特別展「フレスコ」文化財展覧会」
165.	京都大学大学院文学部研究科附属文化遺産学・人文知識センター 「京都大学構内遺跡調査研究年報2019年度」
166.	同志社大学歴史資料館 「同志社大学歴史資料館 館報第23号」
167.	同志社大学歴史資料館 「同志社大学歴史資料館調査報告書 第17集 公家町遺跡発掘調査報告書」
168.	国立民族学博物館 「PainAsia Project Series 28 東部科学省科学研究費補助金 (新学術領域研究) 2016-2020 バレオアジア文化史学 人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化した文化人類学の本質を探る」
169.	大手前大学史学研究所 「大手前大学史学研究所紀要 第14号」
170.	公益財団法人 竹中大工道具館 「千年の礎 古代瓦を重く」
171.	The Executive Committee of the Silk Road Friendship Project Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture "Proceedings & Report of the Conference "Saving the Syrian Cultural Heritage for the Next Generation: Palmyra A Message from Nara" July 11-14」
172.	公益財団法人山由大和古代文化財協会 「研究紀要 第24集」
173.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第126集 藤原遺跡群」
174.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第126集 本文編・図版編 平城宮左京三条二坊十四坪」
175.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第127集 野野原遺跡」
176.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第128集 毛塚塚遺跡」
177.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第129集 孝原中ノ坊遺跡」
178.	奈良県立橿原考古学研究所 「青陵第156号」
179.	奈良県立橿原考古学研究所 「青陵第157号」
180.	奈良県立橿原考古学研究所 「青陵第158号」
181.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県遺跡調査概報 2019年度 第一分冊」
182.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県遺跡調査概報 2018年度 第二分冊」
183.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県立橿原考古学研究所年報 45 平成 30年度 (2018年度)」
184.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県立橿原考古学研究所紀要 考古学論叢第43集」
185.	奈良県立橿原考古学研究所 「社団法人橿原考古学協会の軌跡」
186.	奈良県立橿原考古学研究所 「ノゾド文化の源流を辿る」
187.	奈良大学文学部文化財学科 「文化財学科 第38集 坂井秀徳先生退職記念論叢」
188.	山本瓦工業株式会社 「百済の本瓦新研究」
189.	奈良県 「奈良県中近世城跡跡調査報告書第一分冊一」
190.	鳥取大学 地域考古学 考古学研究室 「大橋21号墳」
191.	高松県大田市教育委員会 「大田市所蔵文化財発掘調査報告書 第35集 島井南遺跡発掘調査報告書1」
192.	高松県大田市教育委員会 「島ノ山地区・金吾集馬池・金吾集山神社遺跡・石見瀬山 Iwami-Ginzan Silver Mine Site」
193.	高松大学研究部 学術情報機構 総合博物館 「高松大学・学術情報機構総合博物館年報 平成 29・30・31 (令和元) 年度」
194.	岡山大学所蔵文化財調査研究センター 「所蔵文化財調査研究センター報 No.62」
195.	岡山大学所蔵文化財調査研究センター 「所蔵文化財調査研究センター報 No.63」
196.	岡山大学所蔵文化財調査研究センター 「岡山大学所蔵文化財調査研究センター紀要 2018」
197.	岡山大学所蔵文化財調査研究センター 「岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第36集 豊田遺跡14-1第17次調査」
198.	岡山理科大学考古学研究室 「田川川原跡第1次発掘調査概報」
199.	岡山理科大学地域考古学研究室 「平山山地域考古 第7号」
200.	広島大学総合博物館 「広島大学総合博物館ニュースレター Vol.13」
201.	広島大学総合博物館所蔵文化財調査部門 「広島大学所蔵文化財調査研究紀要 第11号」
202.	山口大学所蔵文化財資料館 「山口大学所蔵文化財資料館紀要 第30号 (こころ文庫) 令和2年春号」
203.	山口大学所蔵文化財資料館 「山口大学所蔵文化財資料館年報 第13号」
204.	愛媛大学所蔵文化財調査室 「愛媛大学所蔵文化財調査報告 X X II-2 文京遺跡群-2 (本文編)」
205.	愛媛大学所蔵文化財調査室 「愛媛大学所蔵文化財調査報告 X X II-2 文京遺跡群-2 (表・図版編)」
206.	愛媛大学所蔵文化財調査室 「愛媛大学所蔵文化財調査報告 X X III 愛媛大学所蔵文化財調査室年報 2017・2018年度」
207.	北九州教育委員会 (市民文化スポーツ局文化部文化企画課) 「北九州文化財調査報告書第163集 中尾遺跡第2地点・富野第1・北遺跡・八坂神社古墳群第2地点」
208.	北九州教育委員会 (市民文化スポーツ局文化部文化企画課) 「北九州文化財調査報告書第164集 約新南塚遺跡第3地点・第4地点」
209.	北九州教育委員会 (市民文化スポーツ局文化部文化企画課) 「北九州文化財調査報告書第165集 八尾子神遺跡」
210.	北九州教育委員会 (市民文化スポーツ局文化部文化企画課) 「北九州文化財調査報告書第166集 長良寺遺跡」
211.	九州大学大学院人文科学研究科考古学研究室 「平山山遺跡日置野原遺跡発掘報告書」
212.	九州大学所蔵文化財調査室 「九州大学所蔵文化財調査室報告 第3集 九州大学筑紫キャンパス遺跡群 (興福寺遺跡) 総括報告書一編文・弥生時代編一」
213.	九州大学所蔵文化財調査室 「九州大学所蔵文化財調査室報告 第3集 箱崎遺跡-H2K 1802・1805・1902地点一」
214.	熊本大学所蔵文化財調査センター 「熊本大学所蔵文化財調査センター特報展示 2019 黒髪のみかし屋」
215.	熊本大学所蔵文化財調査センター 「熊本大学所蔵文化財調査報告書第15集 熊本大学構内遺跡発掘調査報告書15」
216.	熊本大学所蔵文化財調査センター 「熊本大学所蔵文化財調査センター年報 25」
217.	鹿児島大学所蔵文化財調査センター 「鹿児島大学所蔵文化財調査センター年報 34」
218.	鹿児島大学所蔵文化財調査センター 「鹿児島大学所蔵文化財調査センター調査報告書第16集 鹿児島大学構内遺跡」

引用文献

- 小杉 康編 2002 北大構内の遺跡Ⅻ. 北海道大学.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2004 K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅰ (遺物・遺構編). 北海道大学.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2005 K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅱ (自然科学分析および出土遺物・遺構考察編). 北海道大学.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2006 北大構内の遺跡Ⅻ. 北海道大学埋蔵文化財調査室.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2008 北大構内の遺跡Ⅻ. 北海道大学埋蔵文化財調査室.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・荒山千恵編 2011 北大構内の遺跡Ⅻ. 北海道大学埋蔵文化財調査室.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・坂口 隆・本山志郎編 2016 北大構内の遺跡Ⅻ. 北海道大学埋蔵文化財調査センター.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2019 北大構内の遺跡Ⅻ. 北海道大学埋蔵文化財調査センター.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2021 北大構内の遺跡Ⅻ. 北海道大学埋蔵文化財調査センター.
- 小山正忠・竹原秀雄 1996 新版標準土色帖. 財団法人日本色彩研究所.
- 総峡山積・五十嵐八枝子・近藤 務・鎌田耕太郎・吉田充夫・地徳力・外崎徳二・工藤千春・岡村 聡・加藤 誠 2007 札幌市街域における 150 m 掘削コアの第四系層序. 地質学雑誌, 113, pp. 391-405.
- 大丸裕武 1989 完新世における豊平川扇状地とその下流氾濫原の形成過程. 地理学評論, 62, pp. 589-603.
- 吉崎昌一編 1995 北大構内の遺跡 平成3・4・5・6年度 10. 北海道大学.
- 吉崎昌一・岡田淳子編 1988 北大構内の遺跡 昭和60-61年度 6. 北海道大学.

報告書抄録

ふりがな	ほくだいこうないのいせき にじゅうはち							
書名	北大構内の遺跡 XXVIII							
副書名								
巻次								
シリーズ名	北大構内の遺跡							
シリーズ号	XXVIII							
編著者名	小杉 康・高倉 純・守屋豊人							
編集機関	北海道大学埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目 TEL.011-706-2671 FAX.011-706-2094							
発行年月日	2022年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査 面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
K 3 9遺跡	札幌市北区	1101	39					
北キャンパス創成科学研究棟 東地区				43度5分6 秒	141度20分 10秒	20200820～ 20201002	194	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
北キャンパス創成科学研究棟 東地区	—	—		—		—		古地形の把握

北大構内の遺跡 XXVIII

令和4(2022)年3月31日発行

発行 北海道大学埋蔵文化財調査センター

札幌市北区北11条西7丁目

編集 小杉 康・高倉 純・守屋豊人

印刷 株式会社アイワード

札幌市中央区北3条東5丁目5番地91

HOKKAIDO UNIVERSITY

CAMPUS SITES

XXVIII

Archaeological Research Center,
Hokkaido University
March, 2022